

Title	<講演>3. 男性ホルモン依存性のマウス乳癌について(京都大学結核研究所昭和39年度学術講演会)
Author(s)	峰下, 鍬雄
Citation	京都大學結核研究所紀要 (1965), 13(2): 217-217
Issue Date	1965-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/51839
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

臨床例や剖検例でも反対側リンパ節への転移が少なからずみられた。

肺癌が胸壁肋膜や横隔膜に浸潤している場合にはそれらの部位のリンパ路を介して転移が招来されるが、横隔膜から腹部のリンパ節に注ぐリンパ路は重要である。

肺癌の転移は解剖学的にみられる正常なリン

パ径路、変異径路または副側路に沿って招来され、逆行性転移は狭い範囲に限られているようである。従って、肺癌の外科的治療に当っては、正常な解剖学的径路とくに原発巣の位置とリンパ節転移の仮想的な存在部位との関係を念頭におきつつ廓清範囲を決定し、その範囲の徹底的廓清が必要である。

2. 肺における扁平上皮癌の実験的発生

安 平 公 夫 (京大結研内科学第二)

肺における扁平上皮癌の発生は、従来至難のこととされ、その成功を報じた実験は極めて限られたものである。しかし教室の宗実によって行われた実験では、予め結核菌で前処置（皮下注射）されたラットにおいて、発癌剤 20-methylcholanthrene の 5mg を含む Freund の adjuvant を、切開した気管より入れられたビニール細管を通じて肺に注入することにより、80%を越える高率に肺腫瘍を発生させることに

成功し、その大部分が扁平上皮癌であることが明かにされた。この際発癌に先立って肺に多発性の壊死巣が発生し、これを取囲む肉芽織が癭痕性に傾く場合に、そこに再生した気管支上皮に扁平上皮化生が起る。この化生上皮がケラチンを造生して一方では epidermoid cyst となり、また多くの場合には粘膜下層に浸潤を起して、終に典型的な扁平上皮癌となることが明かにされた。

3. 男性ホルモン依存性のマウス乳癌について

峰 下 鋈 雄 (京大結研病理学
塩野義研究所)

従来マウスのホルモン依存性癌は稀とされている。私達は雌に自然発生したホルモン非依存性の乳癌を雄から雄に継代移植することによって男性ホルモン依存性に変えることが出来た。これを Shionogi carcinoma 115 と命名しその生物学的性状を調査し報告した。

1. この癌は dd-s マウスの雄にのみ増殖し雌には増殖しない。去勢雄には増殖しないし、雌でも男性ホルモンを投与すると増殖する。

2. この癌の組織学的所見はホルモン非依存

性の時代も、男性ホルモン依存性を獲得した後にも別段変化を認めない。

3. 癌細胞に染色体を調べるに初代は勿論男性ホルモン依存性獲得後も染色体数及び Caryotype において雌マウスの性質をそのまま保持しておく。

7. Shionogi carcinoma 115 から更にホルモン非依存性癌を、このものから更に新たな男性ホルモン依存性の Clone をつくった。

4. 健康人尿中の抗結核菌性因子について

大 島 駿 作 (京大結研病態生理学)

健康人尿を各種イオン交換樹脂或はセルローズ (Amberlite IR-120, Amberlite IRA-400, Dowex 50, Dowex 2, P-Cellulose) 及び活性炭

によるカラムクロマトグラフィーにより多数の分割に劃分することによって、*in vitro* で著明な結核菌発育抑制作用を有する物質 (B 及び E)